

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号

第百九十六号

原告団レポート

CO患者——
林田 繁行さん

兄の誘いで

この数年のあいだに、住宅が建てこんできた荒尾市の八幡台。その一角、三十三番十八に林田繁行さん(五十五歳)の住いがあつた。いわゆる新興住宅地であり、整然とした区画のなかに、それぞれの趣きを凝らした家並みだが、県営・市営の五階建ての建物もある。昭和十六年に高等小学校を出ると、小倉の陸軍造幣所の技能者養成工となり、同十九年の暮れに鹿児島海軍航空隊の予科に入る。も



1981年1月3日、林田さん宅には家族全員が集合した。1年間、この写真は額におさまっていた。前列左から、奥さん、繁行さん、長男博文さん。後列左から、二女妙子さん、城戸光広さん、長女悦子さん、井川利治さん、三女則子さん、竹原茂樹さん。(お孫さんは省略しました)

ちろん志願してのことだが、もう太平洋戦争も末期。せめてもと飛行機乗りを目指したが、飛行機には乗れず、終戦まで鹿屋、串良辺りで山中の基地作りをさせられた。十八、九歳のころとにかうく腹がへて……と当時の食料難だけがこぼりついている。

一家揃って

終戦となつてすぐ帰郷。天草の有明町の出身で、当時父親が運搬船で石垣の石を運んでいたの、その仕事を手伝う。「ろ」を漕ぎ、結婚してから大谷社宅へ。そ

入社後、三川炭炭露炭で被災するまで採炭一筋。最初は寮(第五親和寮)暮らしだった。その仕事を手伝う。「ろ」を漕ぎ、結婚してから大谷社宅へ。その後、石を積んだり降ろしたりする労働だった。父親は九十三歳で今も健在とか。

子供のころ

そうするうちに、ひと足早く万田鎮に勤めていた兄が「坑内に下がつてみんか」というので、あま

奥さん(カズエさん、昭和三年三月生まれ)との出会い「ごく普通」とのこと。天草の同じ学校で奥さんが一級下というから、幼

患者として、活動家として

裁判勝利と災害絶滅をねがう

性格がかわつて、おとなしく

っているように見えるが、過去の生きざまを思い、こんごのことを考えると苦いおもひにかられる。

十月のある日、子供たちが定年退職の祝いをしてくれたそうだが、子供たちがそれぞれ一口ずつお祝いの言葉をいうのが、うれしくもあつたが、それは身にこたえるものでもあつた。

いまは成人した子供たちであるが、博文さんが「爆発のあと、親と一緒にいることができなかったのがつらかった」といった時、奥さんは思わず涙が出たという。

勤めた職責

当時、中学三年を頭に中一、小三、小一と四人の子供をかかえ、入院と賃金ダウンで生活は容易でなかつた。奥さんもアルバイトやアソニット工場で働いたが、博文

の半数が死んだ。残った者はCO患者となつた。三川の切羽は袋切羽だったので、そこから出て行かなければならないのは全員の助かったかも知れない、と彼は残念がるのだ。

自信がない

「被災前は、家ではちかちかというファンマンでした。時には返す言葉もないくらいで……。それが」

天領病院から帰ったあと、一週間も経たずに「どうも正常じゃなかババ」という周りの人々の声や、自分でも異常な発汗、不眠などを自覚し、万田分院(現在はな

林田さん自身には、災害発生時の記憶がほとんどないが、奥さんは「家にいてドンという音を聞いた。近所の人が坑外の事故らしいという話をしていたが、夕方になって三川鎮は大事だ」と聞いて八時ごろからバスで三川鎮前の組合事務所へ。

おかしかババ

林田さん自身には、災害発生時の記憶がほとんどないが、奥さんは「家にいてドンという音を聞いた。近所の人が坑外の事故らしいという話をしていたが、夕方になって三川鎮は大事だ」と聞いて八時ごろからバスで三川鎮前の組合事務所へ。

石炭政策が

裁判は、「もっとスピードをあげられないのか」「新労の患者は山野の和解に大きな関心を持っている」と、会社の責任追及と、裁判闘争に取り組んできた態度はきびしい。

「夕張災害に心が痛む」「答申では石炭見直しにならないし、もがけはもくもく無理して、災害につながるのでは」と、石炭政策を痛烈に批判する。